

鳥取の民話

収録・解説 酒井董美

74

語り手 別所菊子さん
(明治35年生まれ)
昭和63年8月21日収録

「あらすじ」
昔、修行僧がやって来た。日が暮れかけたので、ある家へ「泊まらしてくれんか」と言ったら、「年の内にはあやう泊めんけど、奥の山寺がある。そこでもよけりゃ泊まんはない」と言っつ。

その僧は寺で泊まった。
讚(仏の徳をたたえる言葉)を一心に拝んでいる最中、上の方がピカピカ光ってドスンと大きな音がしたので、僧がのぞいたら、大きな坊主が座っておったつて。外の方から生ぬるいような風が吹いてきた。「テッチ

修行僧の言葉で消える

て来る。「サイチクリンツチンボウと言つのは、のケイ」「ナンチのリギこの寺を建ったときに使ヨ」「ホクヤのビヤッコ」った樁の杵だ。消えてである。そして「何だかなくなれ」と言つと消えのビヤッコは、この寺か今夜は人臭いやな」と言つてしまった。出した。

ン坊、うちか留守か」「うちでござる。どなたでござる」「トウザンのバコが、仏さんの教えられたことを言つてみると、消えてしまふ。「ナンチと同じように坊主が入っふすまを開けて出て」テのリギヨは、この寺の南

の大きな池に住む古い鯉(こい)「こつ言つと、またな。それから、南の方の消えてしまふ。「ホクヤ池を干したら大きな鯉がのビヤッコは、この寺から北におる白い狐だ。消えてなくなれ」と言つたら、消えるし、みんな消えてしまつたつて。昼寝している狐を捕まえてきたり、西の竹藪の中に古い鶏(とりに)が一羽

「トウザンのバコツちゆうのは、この寺の東の藪におる馬の頭だ。消えてなくなれ」と言つたら「あのお坊主もかまれてしまったらあか。行つてみたれ。村中行つてみたらあ」と村の衆みんなに「この寺を、わたしで寺へ上がった。修行僧は「出たとも出たら、」こで信心してたとも。今日はまあ、捜ごされりゃあ、喜んでおいてみてごしえ」と言いまえさんにあげます」となごるので、アマダへ上がったつら、隅からピッカピッカ光るもんがある。「あれがテッチン坊だ」と言つたのはよかつたけれど、こわいので、「おまい、先行け」と言ひあの『日本昔話大成』によつていたが「いっしょに行かあ」ということで行つてみたら、樁の杵だつた。

そのうち修行僧がみんなに「この寺を、わたしにくださらんか」と言つたつて。その話は、関敬吾博士の『日本昔話大成』によれば本格昔話の「愚かな動物」の中に位置づけられ、人気のある話の一つである。

解説

化け物問答

(東伯郡三朝町吉尾)



イラスト・福本隆男

それを下へおろして割つたところ、精が入つ

(元鳥取短期大学教授)
(水曜日に掲載)